

フランス語の接続法とポリフォニー

2021年4月17日

日本フランス語学会第334回例会

渡邊淳也 (東京大学)・佐多明理 (東京大学大学院)

1. はじめに

・接続法は大まかには、確信度が低いことがらや、疑念をもたれることがら、あるいはのちに実現がのぞまれる未実現のことがらに適用されることが多い。このため、接続法は現実性を判断したり、断言したりすることを回避している、と考える研究が少なくない。

« Le subjonctif indique une suspension du jugement : le contenu propositionnel est pris en considération, sans jugement prononcé. » (Le Goffic 1993 : 94)

« Le subjonctif indique que le locuteur (ou le scripteur) ne s'engage pas sur la réalité du fait. » (Grevisse et Goose 2011 : 1152)

・しかし、その考えかたでは理解しがたい事例もいくつかある。例文 (1) のように *Que...* 節が文頭にたつ場合の接続法、例文 (2) の *C'est dommage que...* のような判断・感情をあらわす主節のあとでの接続法、例文 (3) のような、唯一性や最上級をあらわす先行詞にかかる関係節中の接続法、そして、例文 (4) にみられる *bien que...* のような譲歩をあらわす接続詞句のあとでの接続法。これらの例においては、*que...* 以下の内容が確実な事実であり、話者もそのことを理解しているにもかかわらず、接続法が用いられる。本発表ではこれらの例も包括的に説明することをめざす。

(1) *Que nous ayons intérêt à lire, c'est évident.* (渡邊 2018 : 60)

(2) *C'est dommage que tu ne puisses pas venir.* (*idem*)

(3) *Claire est la seule personne avec qui je me sente bien.* (*idem*)

(4) *Bien qu'il soit fatigué, il continue à travailler.* (*ibidem* : 62)

2. ポリフォニー (polyphonie)

・音楽の領域で用いられていた「ポリフォニー」(polyphonie、多声性) という用語を、言語学・言語論の領域ではじめて本格的にとなえたのは、バフチン (1995、原書 1963) であった。

・言語内論証理論では、バフチンから「ポリフォニー」の概念をうけつぎ、さらにそれを発展させることによって、言語学的な研究が推進されている。これまでの研究を見わたすと、Ducrot (1984) で提唱されたポリフォニー理論 (théorie de polyphonie) を、ポリフォニーの「標準理論」とみなすことができる。言語学でいうポリフォニーとは、ある発話文 (énoncé)、またはいくつかの発話文の連鎖の中に、複数の異質の言語主体の「声」(voix) が響いているとする考えである。

・ある一つの発話文に、話者 (locuteur) と発話者 (énonciateur) を想定する。話者は発話文を発語する主体であり、発話者は発話文の内容 (の一部) に対する責任を担う主体である。Ducrot (1984) においては、「発話者」という用語が「局所的な内容を担う、(場合によっては潜在的な) 発言者」という独特の意味合いで用いられている¹。

¹ ただし、Ducrot (1984) 以降、ポリフォニー理論は大きく変貌しており、特にここで問題となっている特異な意味での「発話者」の概念は、Ducrot (1984) をうけつぎ複数の流派で、いまでは一致して放棄されている。詳細は Anscombe (2001)、Nølke (2004) (2009 a) (2009b)、Lescano (2009)、Carel (2011)、渡邊 (2011) (2015) を参照。本発表における接続法の事例の記述でも、先行研究で言及されている場合以外、「発話者」の概念は積極的には用いないこととする。

・話者と発話者のあいだのポリフォニーが記述に役立つ事例として、もっともよく言及されるのは、否定の事例であろう。

(5) **Pierre n'est pas gentil.**

(Ducrot 1984 : 214)

において、Ducrot は、「*Pierre est gentil.*」という内容を断定する発話者 E1 と、その断定に対する否認を担う発話者 E2 を想定している。(5) の文を発する話者は、通常、E2 に同化している。そして E1 は、対話者 (*allocataire* または *interlocuteur*) や第三者 (*tiers*) に帰せられる。

・このような否定のポリフォニー的分析の論拠として、Ducrot はつぎのような現象をあげている。(5) の文の延長として、つぎのようにいうことができる。

(6) **Pierre n'est pas gentil. Au contraire, il est détestable.**

(*ibidem* : 216)

・ここで問題になるのは、*au contraire* 「その反対に」とは、何の反対かということである。それは、「*Pierre n'est pas gentil.*」の全体ではなく、それによって否認されると同時に伝えられている「*Pierre est gentil.*」という観点である。結果として、(6) で *au contraire* が連結する前件から後件へのつながりとしては、「言いつのり」(*renchérissement*) の関係がみられることになる²。

・それに対して、つぎの例にみるように、肯定文からは、同様の発話文連鎖は不可能である。

(7) **Pierre est gentil. # Au contraire, il est adorable.**

(*idem*)

・(6)、(7) の対比からしても、肯定文と否定文は対称的ではなく、後者のみにポリフォニー的な性質を認めうることがわかる。

・さらに、上記で単に「話者」と呼んできたものは、「話者としての話者」(*locuteur en tant que tel ; L* という記号で示される)、すなわち、当該の発話文を発するかぎりでの話者である。話者の概念にはもう一つ、「世界存在としての話者」(*locuteur en tant qu'être du monde ; λ* という記号で示される)、すなわち、発話行為だけでなく存在全般として、経験的世界を生きる話者がある。

・たとえば、「*Hélas!* (嗚呼!)」や「*Chic!* (やった!)」のような間投詞 (からなる発話文) と、「*Je suis triste.* (私は悲しい)」や「*Je suis content.* (私はうれしい)」といった属詞文との相違は、悲しみや喜びの感情が、属詞文では λ に付与されているのに対して、間投詞の場合は L に付与されているという相違に帰せられる (Ducrot 1984 : 200)。属詞文が客観的である (すなわち、話者自身を外在的にとらえなおしている)³ のに対して、間投詞の場合は発話文そのものが悲しみや喜びの色に染まっている (すなわち、その間投詞を発するかぎりでの話者が感情をもっている) という直観的印象を、 L と λ の区別によって明確に説明できるのである⁴。

3. 言語使用の三層モデル (Three-Tier Model of Language Use)

・つぎに、Hirose (2000)、廣瀬 (2016) (2017) に依拠しながら、「言語使用の三層モデル」の概要を、本発

² 連結辞 *au contraire* の記述については田代 (2014)、「言いつのり」の他の事例研究については Watanabe (2006) を参照されたい。

³ 世界存在としての話者 λ は、現実世界を経験し、状況に反応する、いわば「登場人物」としての話者であり、話者としての話者 L がその感情を与える側であると思われるが、上記の議論では、その λ が、話者としての話者 L から外在的にまなざされていることをもって、「感情が λ に付与されている」と言っているのであり、属詞構文による表現のほうに λ に関連づけられていることに留意する必要がある。それに対し、間投詞による発話文に関しては、認識主体とその対象が未分化であることをもって、 L に感情が付与されることになっている。これらの事例にみられる視点の相違については、さらに渡邊 (2020) を参照されたい。

⁴ L/λ の対立の事例研究としては、Watanabe (2014) を参照されたい。

表とかかわりが深い部分を中心として確認しておきたい。

・まず、話者を「私的自己」と「公的自己」にわけると。私的自己とは思考や意識の主体であり、公的自己は伝達や報告の主体である。対話の場面にのぞんでいるのは公的自己である。そして、私的自己による思考や意識を示す言語表現を「私的表現」、公的自己による伝達や報告をおこなう際に用いられる言語表現を「公的表現」という。

・前節でみた Ducrot (1984) の L/λ と、Hirose (2000)、廣瀬 (2016)(2017) の公的自己 / 私的自己は、類似した対概念として注目される。それらの相違点として指摘できるのは、λ には「身体髪膚をそなえ、世界を生きる主体」、「登場人物」としての側面があるのに対して、「私的自己」は、私的表現の担い手であることからしても、内言レベルであっても言語的な側面のみを考慮しているということである。この点をのぞくと、L/λ と、公的自己 / 私的自己を同様の対立として扱うことができる。

・三層モデルは、言語使用が「状況把握層」、「状況報告層」、「対人関係層」の三つの層からなると分析する。「状況把握は、私的自己 S が状況 O を解釈し、一定の思いを形成する層、状況報告は、私的自己による状況把握を公的自己 S が聞き手 H に伝達する層、そして、対人関係は、公的自己 S が聞き手との関係を考慮し、対人調整を行う層である」(廣瀬 2017: 3)。

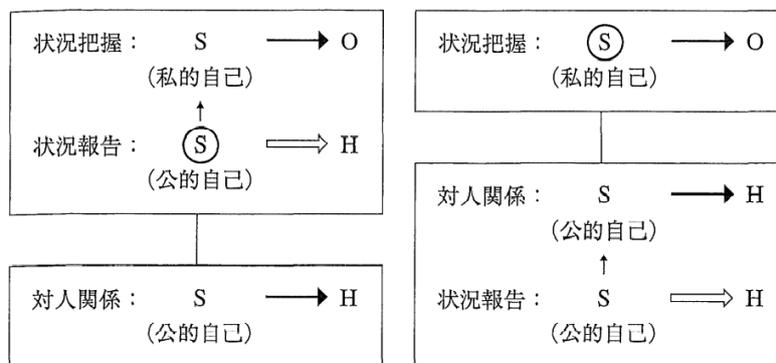


図 1：公的自己中心の英語

図 2：私的自己中心の日本語

S：話し手 (主体) O：状況 (客体) H：聞き手
 →：捉える ⇨：伝える ○：無標の直示的中心

(廣瀬 2017: 3)

・英語は公的自己中心言語であり、「状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される関係になっている」(idem)。また、「図 1 において状況報告の S から状況把握の S への縦矢印は、英語では状況を把握する私的自己が状況を報告する公的自己の観点から捉えられることを表す」(idem)。

・日本語は私的自己中心言語であり、「状況把握が状況報告と対人関係から独立している一方、状況報告は対人関係と一体化する関係になっている」(idem)。そして、「図 2 において状況報告の S から対人関係の S への縦矢印は、日本語では公的自己は状況を報告する際に聞き手との関係において自己を規定することを表す」(idem)。

・日本語は私的自己中心言語なので、自分と自分以外の区別に重きをおき、自分で直接得た情報か否かを区別する。他者由来の情報については、「のだ、ようだ、そうだ、らしい」などの「間接形」(神尾 1990)をもちいる。このことはまた、日本語では状況把握層のみが独立しており、状況報告層とは離れていることから説明できる。(廣瀬 2017: 13)

(8) a. [話し手が窓から外を見て] あっ、雨が降ってる。

b. (みんなが傘をさしているから) 雨が { 降ってるんだ / #降ってる }。

c. A: 太郎は何と言ったの。

B: 雨が { 降ってるって / #降ってる }。

(Shizawa 2015: 163; 廣瀬 2017: 13)

・英語は公的自己中心言語なので、命題が正しい情報を伝えていると話し手が信じてさえいれば、直接得た情報か否かを区別する必要はない。このことはまた、英語においては状況把握層と状況報告層が一体化していることから説明できる。(廣瀬 2017: 13)

(9) a. [The speaker is looking out the window.] Oh, it's raining.

b. It's raining (, because they are walking under their umbrellas).

c. A: What did John say?

B: It's raining.

(Shizawa 2015 : 162 ; 廣瀬 2017 : 13)

・日本語では、(10a) はひとりごとのように解釈されるのに対し、(10b) のように終助詞や丁寧の助動詞をつけることで初めて対話者にむけられた発話のように感じられる。このことは、日本語で状況報告層が対人関係層と一体化していることからくる(対話者に対する配慮なくしては状況報告ができない)。

(10) a. 今日は金曜日だ。

b. 今日は金曜日 { だよ / です / でございます }。

(廣瀬 2017 : 13)

・これに対し、英語では、(11a) のみで対話者への伝達に十分である。対話者に対する配慮を示すには、(11b) のようにさまざまな呼称表現をつけることになるが、これらはあくまでも任意要素である。このことは、英語においては対人関係層が独立していることによって説明できる。

(11) a. Today is Friday.

b. Today is Friday, { madam / ma'am / Mrs. Brown / Jane / darling / honey / etc.}.

(*ibidem* : 14)

・以上のような日本語と英語の比較において、フランス語が占める位置は、基本的には英語と同様である。

(12) は (9) と、(13) は (11) と翻訳的關係にあり、コメントできることも同様である⁵。

(12) a. [Le locuteur regarde dehors par la fenêtre] Tiens, il pleut.

b. Il pleut (, parce qu'on marche avec son parapluie).

c. A: Qu'est-ce que Jean a dit ?

B: { Il pleut. / Qu'il pleuvait. }

(13) a. Aujourd'hui, c'est vendredi.

b. Aujourd'hui, c'est vendredi, { madame / madame Dupont / Jeanne / ma chérie / mon chou / etc.}.

・しかし、以上でみてきた各言語の特徴は、あくまでも「デフォルト志向性」であり、特別な条件のもとでは解除されることがある (cf. 今野 2017)。

4. 接続法と内的ポリフォニー・外的ポリフォニー

4.1. 内的ポリフォニー (polyphonie interne)

・上述の Ducrot (1984) をうけて、フランス語の接続法とポリフォニーを本格的に関連づけたのは Nølke (1993) の研究である⁶。

・Nølke (1993) は、接続法が「内的ポリフォニー」のマーカであるという仮説を提出している。「内的ポリフォニー」とは、つぎのように定義される。

« On parlera de polyphonie interne dans le cas où un énonciateur (e_i) est associé à l₀ et un autre (e_j) à L. »

(Nølke 1993 : 196)

⁵ ただし、(12c) にみるように、「Qu'est-ce que Jean a dit ?」への答文を Que... ではじめることはあるので、若干、公的自己重視の程度の相違が考えられる。

⁶ 実は、接続法をポリフォニーと関係づけることにおいても、先駆的であったのは、2節でポリフォニーの概念の先駆者として言及したバフチンである。「L'absence de concordance des temps et la non-utilisation du subjonctif prive notre discours indirect d'identité propre」(Bakhtine 1977 : 175)とっており、従属節における接続法を、時制の照応とならんで、間接話法(すなわち、他者の言説を伝達する手段)に特有の徴表とみなしている。

- ・ここで表記上のちがいがあある。Ducrot のいう L が Nølke の l_0 にあたり、 λ が L に相当する⁷。
- ・接続法が内的ポリフォニーのマーカーであるという自説をうらづける例として、Nølke はつぎの例をあげている。

(14) De là vient que Daudet n'a pas **fait** école ; de là vient aussi qu'il **plaise** à tant de lecteurs différents.

(Nølke 1993 : 199)

- ・この例について、Nølke はつぎのようにいっている。

« [...] le premier énoncé sert à expliquer un fait présenté comme déjà connu par l'allocutaire, alors que le locuteur profite de la situation pour présenter dans le deuxième énoncé un autre fait qui s'explique par la même raison. »

(*ibidem* : 200)

- ・しかし、Nølke には異議をとないたい。この説明をむしろ正反対にしたほうがよいと思われる。その理由として、第 1 に、(14) の命題内容に着目すると、「ドーデーが一派をなさなかった」ことを知るためには文学史的な予備知識が必要になるが、それにくらべれば「ドーデーが多くの読者に好かれている」ことのほうが周知の事実であることがわかる。第 2 に、より一般的に、Nølke の所説を逆転したほうが、つぎの例にみられるように、一般的に既知の内容 (前提、旧情報) を接続法であらわし、未知の内容 (主張、新情報) を直説法であらわすこととの整合性が保たれる。

(15) a. Je comprends que Paul **est** mécontent.

(Leeman-Bouix 2002 : 96)

b. Je comprends que Paul **soit** mécontent.

(*idem*)

- ・(15a) と (15b) は、補足節の叙法のみがことなるミニマルペアであるが、その叙法の選択によって主節動詞 *comprendre* の意味まで変わってきている。(15a) は話者がさまざまな徴候から判断して、ポールが不満だという事実を知的に理解できると言っている。ポールが不満なことは確実な事実とみなされており、かつ、新情報として断定されている。それに対し、(15b) は、ポールが不満であることは断定の対象になっていない。ポールが不満になってもしかたがないような出来事ばかりが起きたことから、ポールの心中を察し、同情を表明しているのである。つまり、接続法で示されているポールの不満は旧情報 (前提) であり、それに対する同情こそが断定の対象になっている⁸。

4.2. 外的ポリフォニー (polyphonie externe)

- ・一方、Nølke (1993) の「内的ポリフォニー」説では説明できない接続法の例が多く存在する。公平を期するため、「内的ポリフォニー」の対概念である「外的ポリフォニー」についての、Nølke 自身による定義を確認しておこう。

« On parlera de polyphonie externe si quelqu'un de différent de L et de l_0 est associé à un des énonciateurs. »

(Nølke 1993 : 200)

- ・「L と l_0 と異なるなにもものか」とは、対話者、または第三者 (まとめていうと、「他者」 *autrui*) のこ

⁷ « Si j'ai choisi une autre paire, c'est que je pense que la mienne reflète mieux le fait que le locuteur en tant que tel (l_0) peut être considéré comme une sorte d'instanciation (dans l'énoncé portant l'index o) du locuteur en tant qu'individu. » (Nølke 1993 : 196) この指摘は、英語において公的自己が無標の直示的中心になるという廣瀬 (2016) (2017) の指摘と軌を一にする。なお、上記の引用から知れるように、また、Nølke の l_0 は Ducrot の L とおなじく「話者としての話者」(locuteur en tant que tel) と称するが、Nølke の L は Ducrot の λ と若干ちがって「個人としての話者」(locuteur en tant qu'individu) と名づけられている。

⁸ 日本におけるスペイン語学では、和佐 (2014)、福寫 (2019) が「直説法は新情報 (主張) を示し、接続法は旧情報 (前提) を示す」という仮説を提出している。研究対象となる言語はちがっていても、参考になる仮説である。とくに福寫 (2019 : 121) は、(28) の « De là vient que... » と翻訳的關係にあるスペイン語 « De ahí que... » を分析し、que... 以下の叙法選択の規則として、内容が主張の対象になっていれば直説法、前提事実を示す場合は接続法を用いるとしており、本節での考察と同様の提案をしている。

とである。Soutet (2000 : 138-140) は、接続法の一部の用法にポリフォニーをみとめているが、その際のポリフォニーは、実際には外的ポリフォニーである。たとえば、つぎの例をみよう。

(16) a. Croyez-vous que Dieu **est** Père, Fils et Esprit ? (Soutet 2000 : 139)

b. Croyez-vous que Dieu **soit** Père, Fils et Esprit ? (idem)

・補足節が直説法でのべられている (16a) では、補足節は話者による断定の対象になっており、その内容に対する対話者の態度を問うている。それに対して、(16b) では、

« L, s'il assume, en tant qu'E1, la question (*croyez-vous*), n'assume pas le contenu de la conjonctive, renvoyé à un autre énonciateur (E2). Il y a donc polyphonie et le subjonctif en [(16b)] est le signe d'une discordance, voire d'un conflit, entre E1 et E2. » (idem)

・ここでいうポリフォニーは内的ポリフォニーとは考えづらい。なぜなら、補足節の内容 (三位一体説) はむしろ、キリスト教徒による集団的な所信・言明であり、話者はそれを知ってはいても、その立場にはくみしていない (つまり、旧情報でありながら、他者性をはらんでいる) からである。したがって、Soutet のいう E2 は他者に帰すべきものであり、外的ポリフォニーをなしている。

・つぎの例も外的ポリフォニーによって分析するべきであると思われる。

(17) Seulement inquiets, les Français ? Il semble qu'ils **aient dépassé** cet état, qu'ils **aient tiré** le rideau du spectacle de leur nouveau Président, qu'ils **en sont** au stade de la déception. (Lebas-Frączak 2009 : 131)

・非人称表現 *il semble que...* は規範的には接続法を要求するが、実際には直説法が用いられることも少なくない (cf. 渡邊 2004)。

・(17) では、はじめの *Seulement inquiets, les Français ?* が、ともすると他者 (対話者をふくむ) によって信憑されかねない命題として、批判的に提示されており、すでに外的ポリフォニーが準備されている。Il semble que... 以下は「フランス人たちはただ心配しているだけである」ということに対する反論がなされている。反論であるがゆえに、*aient dépassé*、*aient tiré* の背後には、話者とたがいに反論しあう関係にあるような第三者との外的ポリフォニーが想定できる。それに対して、最後に出てくる直説法 *sont* にあっては、話者がみずからの主張を一本化して、結論として提示しているので、ポリフォニーは問題外になる。

5. 接続法の標示するポリフォニーと三層モデル

・以上のことから、本発表では、フランス語の接続法は、内的ポリフォニー、または外的ポリフォニーのいずれかを標示するという仮説を保持する。以下、仮説を三層モデルとのかかわりで検証したい。

・接続法は、1節でみたように、圧倒的に従属節で使われる。そのことは、(18) にみるように、文のなかで命題内容 (*contenu propositionnel*) をあらわす部分とモダリティ (*modalité*) をあらわす部分の階層性が形式的にも明確にあらわれていることを意味する。そして、三層モデルの用語でいえば、命題内容が状況把握層に、モダリティが状況報告層に相当する⁹。

(18)

Il est possible	que je me sois trompé.
モダリティ	命題内容
状況報告層	状況把握層

 (渡邊 2018 : 11)

・一般的には、命題とモダリティは、文中で明確に分離できるとはかぎらない。

(19) Selon la presse portugaise, Cristiano Ronaldo **serait** l'heureux papa de jumeaux nés le 8 juin par mère porteuse.

⁹ 和田 (2017)、(2018) では、モダリティを「対事心的態度」、「対人心的態度」に分け、それぞれを状況把握層、状況報告層に属させるという、いっそう精密な図式を組み立てている。しかし本発表では、当面の問題であるフランス語の接続法に適用可能な図式として、単純化したモデルを仮定している。

・(19) では、**serait** という条件法現在形 (より正確には、**-rait** という条件法語尾) が、命題内容が間接的に得られた情報であることを凝縮的に示しており、モダリティをあらわしている。

・(19) のような場合とちがって、接続法の事例においては命題・モダリティの分離が明確であり、接続法は状況把握層と状況報告層を乖離させる (有標の) 機能を果たすと考えたい。

5.1. 内的ポリフォニーの諸事例

・内的ポリフォニーの用法において、接続法は、三層モデルの用語でいうと、**公的自己と私的自己との乖離または対立**を標示している。

・例として、(15a-b) のミニマルペアを下記 (20a-b) として再検討しよう。

(20) a.	Je comprends	que Paul est mécontent.	[=(15a)]
	状況報告層	状況把握層	
	公的自己 → (私的自己)		

b.	Je comprends	que Paul soit mécontent.	[=(15b)]
	状況報告層	状況把握層	
	公的自己	私的自己	

・(20a) にみるように、補足節が直説法の場合は、文全体が断定の対象になっているため、公的自己が私的自己を包摂するような形で、文全体の内容を保証している。そして、状況把握層と状況報告層が融合しており、公的自己が中心になっている。このことはフランス語のデフォルト志向に一致している。

・それに対して、(20b) のように、補足節で接続法が使われているときは、状況把握層に対応する補足節は私的自己によって担われ、状況報告層のみが公的自己によって担われるという乖離が起きる。内的ポリフォニーをあらわす接続法の事例は、この乖離によって特徴づけられる。

・補足節が接続法であり、補足節の内容を担う私的自己と、状況報告層を担う公的自己がいつそう明確に対立する事例として、つぎの例をあげることができる。

(21)	C'est dommage	que tu ne puisses pas venir.	[=(2)]
	状況報告層	状況把握層	
	公的自己	私的自己	

・(21) では、補足節がまったくの事実をあらわしており、話者もそのことを認識しているにもかかわらず、あえて接続法におくことで、補足節の事実を認識する主体を、文全体を断定する主体から切りはなし、対立させるにいたっている。結果的に、事態をすんなりと事実としては認めづらいという話者の心理を反映することとなる¹⁰。

・さらに、内的ポリフォニーの例として、前置された補足節でもちいられる接続法をあげることができる。補足節が前置された場合は、主節がどれほど断定的な述語であっても接続法がもちいられる。

(22)	Que nous ayons intérêt à lire,	c'est évident.	[=(1)]
	状況把握層	状況報告層	
	私的自己	公的自己	

・この場合は、言語の線状性からして、補足節のみが発せられた時点ではなんらの断定もされていないといえる。通常は後置される補足節をあえて前置し、主題化するという転倒的な語順をとることによって、

¹⁰ この場合の接続法は、英語の「評価的 should」と比較可能であると思われる。澤田 (2006 : 422-450) を参照。

状況把握層と状況報告層が明確に切りはなされ、私的自己と公的自己也乖離することになる。

・ほかに、願望をあらわす例も内的ポリフォニーの事例にかぞえることができる。

(23)

Je souhaite	que vous passiez de bonnes vacances.
状況報告層	状況把握層
公的自己	私的自己

(渡邊 2018 : 60 一部改変)

・願望や祈願の表現は、私的自己によって主体の脳裡に思っていた理想の状況をえがき出すとともに、公的自己がその状況を望むことを断定するという、内的ポリフォニーをはらんでいる。

・つぎのような例も同様に分析できる。

(24)

Il faut	que vous partiez tout de suite.
状況報告層	状況把握層
公的自己	私的自己

(ibidem : 61)

・(24) でも、que... 以下は、私的自己によって主体の脳裡に思っていた理想の状況をえがき出している一方、公的自己がその状況が義務的であることを断定するという、内的ポリフォニーをはらんでいる。

・また、(23) のようなケースから Je souhaite... などの主節が省略されることで成立している独立節の祈願文は、例外的に私的表現が露出している事例であるが、暗黙にされた主節を念頭におくと、上記の願望をあらわす例と同様に考えられる。

(25)

Que son âme repose en paix !
状況把握層
私的自己

(ibidem : 62)

・最後に、関係節の先行詞が最上級や唯一的な意味である場合。これらの意味の背景には、ありうる候補をしらみつぶしに検討し、比較したということなので、「走査」(parcours) がなされている。「走査」は話者の脳裡で (ときには内言として) なされることであるので、私的自己の領分である。したがって、つぎのように図式化できる。

(26) a.

C'est la seule solution	qu'on puisse envisager.
状況報告層	状況把握層
公的自己	私的自己

(ibidem : 89)

・一方、C'est la seule solution que... のあとで直説法を用いることもできる。直説法 (ここでは複合過去) を用いた (26b) は、現実提案に至った解決策が唯一のものだった、といているわけで、解決策を提案したことも、その解決策が唯一であったことも、ふたつながら断定の対象になっている。したがって、文全体が公的自己によって担われていることになる。

(26) b.

C'est la seule solution	qu'on a pu proposer.
状況報告層	状況把握層
公的自己 → (私的自己)	

(idem)

・願望や探索の対象にかかる関係節における接続法も、同様に走査をあらわしており、同様に直説法との対比によって理解できる。(27a-b) は (26a-b) と平行的である。すなわち、(27a) の qui...関係節では走査の対象となる内容が接続法で示されているのに対し、(27b) では関係節の内容も断定の対象となっている。

(27) a.

Je cherche quelqu'un	qui puisse m'aider.
状況報告層	状況把握層
公的自己	私的自己

(ibidem : 88)

b.	Je cherche quelqu'un	qui m'a aidé.
	状況報告層	状況把握層
	公的自己 → (私的自己)	

(idem)

5.2. 外的ポリフォニーの諸事例

・接続法が外的ポリフォニーを標示する事例においては、話者 (公的自己) と「他者」(autrui) のあいだの懸隔が見られる。

・本発表では接続法はなんらかのポリフォニーを標示するという仮説を保持しているため、他者の分類を精緻化すること自体は重要ではないが、どのような事例がふくまれるかを見さだめる助けにはなる。

ここでは、Nølke がのちに構案した ScaPoLine (La théorie scandinave de la polyphonie linguistique, Nølke (2004) (2009 a) (2009 b) 参照) による「談話的存在」(êtres discursifs) の規定を簡略化して用いる¹¹。

・「他者」は「対話者」(allocutaire) と「第三者」(tiers) に二大別される。

・接続法の外的ポリフォニー用法において問題になる「対話者」はテキスト的対話者 (allocutaire textuel, 略号 A) である。A は話者における L (個人としての話者) に相当するが、対話者においては l_0 (話者としての話者) に対応するものはない。なぜなら、 l_0 が帯びる「ゼロ」の指標は、ひとり「話者としての話者」のみが保持する直示的中心をさすからである。

・第三者は、個人的第三者 (tiers individuel) と集団的第三者 (tiers collectif) に分けられる。接続法の外的ポリフォニー用法において問題になる個人的第三者はテキスト的第三者 (tiers textuel, 略号 T) であり、T は話者における L に相当するが、 l_0 に対応するものはない。集団的第三者 (略号は汎称代名詞を借用し ON という) は、なんらかの共同主観を共有するひとつの共同体である。たとえば、ことわざのような民衆知は ON に帰する¹²。ON には話者、対話者が属していても属していなくてもよい。

・(テキスト的) 対話者、個人的第三者はそれぞれの主体の私的自己に相当する。

・これまでに言及した諸主体についてまとめると、つぎの図 3 のようになる。

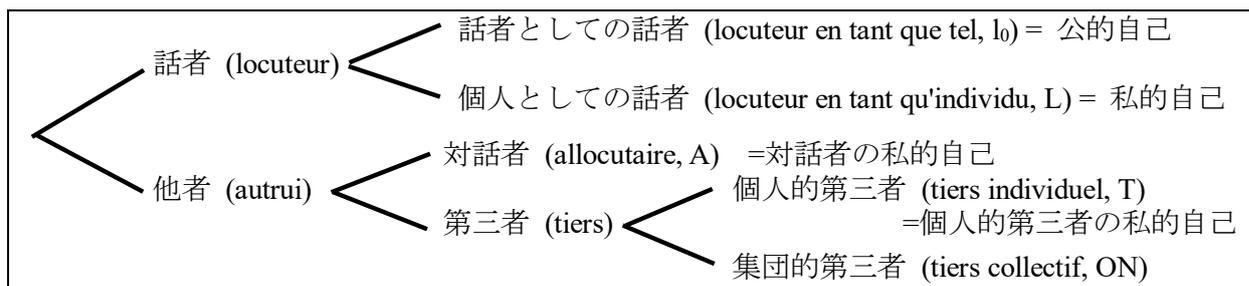


図 3 : 内的ポリフォニー、外的ポリフォニーにかかわる諸主体

・直説法・接続法のミニマルペア (16a-b) を下記 (28a-b) として再検討しよう。

¹¹ Nølke (2009 a) には断片的に接続法の分析があるものの、一貫して ScaPoLine に依拠した接続法の分析はこれまではなされていなかった。佐多 (2020) が新たにこれを試みている。

¹² Nølke は集団的第三者を、異質の集団的第三者 (tiers collectifs hétérogènes, 略号 ON) と均質の集団的第三者 (tiers collectifs homogènes, 略号は「法則」という名詞から LOI という) にわけている。しかしながら、たとえばことわざのような民衆知は、多数のひとつひとつによる発話の蓄積に由来しながらも、ある種の法則と化しているともいえ、異質・均質の分類は困難であるため、本稿では単に集団的第三者としておく。

(28) a.

Croyez-vous	que Dieu est Père, Fils et Esprit ?
状況報告層	状況把握層
公的自己 → (私的自己)	

 [= (16a)]

b.

Croyez-vous	que Dieu soit Père, Fils et Esprit ?
状況報告層	状況把握層
公的自己	集团的第三者 (ON)

 [= (16b)]

・(28a) にみるように、補足節が直説法の場合は、状況把握層も断定の対象になっているため、これをふまえて状況報告層での疑問が成り立っている。状況把握層と状況報告層が融合しており、公的自己が中心になっている。このことはフランス語のデフォルト志向に一致している。

・それに対して、(28b) のように、補足節で接続法が使われているときは、状況把握層に対応する補足節は集团的第三者（ここでは、三位一体説を信じるキリスト教徒の共同体）によって担われ、状況報告層のみが公的自己によって担われる。

・つぎのような、いわゆる「譲歩」用法も、外的ポリフォニーの事例であると考えられるが、他者の声は発話文そのものには顕現しておらず、これまで見た例より複雑である。

(29) a. *Bien qu'il **soit** fatigué, il continue à travailler.* (渡邊 2018 : 62)

b. [phrase stéréotypique] *Quand on est fatigué, on ne travaille pas.*

・ステレオタイプ文とは、集团的第三者 (ON) によって担われる、なんらかの言語共同体で共有されている信念である (詳細は Anscombe 2001、渡邊 2011 を参照) ¹³。ステレオタイプ文はさまざまな発話文の祖型になる一方、ステレオタイプ文に沿った発話文でなくても、たとえば逆接的な発話文はステレオタイプ文を逆手にとることで成立する。(30a) の逆接性は、(30b) を下敷きにしてこそ成り立つ。

(30) a. *C'est un singe, **mais** il n'aime pas les bananes.* (Anscombe 2001 : 70)

b. [phrase stéréotypique] *Les singes aiment les bananes.*

・これをふまえて (29) にもどると、(29a) は (29b) を下敷きにすることで成立するある種の逆接文であり、話者によって担われる (29a) と、集团的第三者によって担われる (29b) のあいだに外的ポリフォニーの関係が存在する ¹⁴。

・命題内容が対話者に帰せられる例をみよう。

(31) Q – *Au Kosovo, les Américains ont été présents partout. Les Européens ont beaucoup aidé ensuite pour la reconstruction sans que personne ne s'en rende vraiment compte.*

R –

Je ne crois pas	que l'on puisse dire cela.
状況報告層	状況把握層
公的自己	対話者 (A)

Tout le monde est conscient de la présence européenne, de l'engagement européen, de la cohésion des Européens dans l'affaire des Balkans, au Kosovo, en Macédoine maintenant.

(Interview de M. Hubert Védrine, le 12 janvier 2002)

・(31) は当時のフランス共和国外務大臣の記者会見の一部であるが、記者の直前の質問の最後の部分、すなわち「EU のコソヴォでの活動が理解されていない」という内容に対する反論である。主節の *Je ne*

¹³ ひるがえって考えれば、(28b) の背後にも、「*Dieu est Père, Fils et Esprit*」という、キリスト教徒によって共有されているステレオタイプ文が潜在しているが、発話文の一部に対応づける表記が可能であるときはいちいち指摘しない。

¹⁴ 文頭にくる *bien que...* 節の旧情報性をふまえ、この例を内的ポリフォニーによって解釈する可能性もある。

crois pas... は論争的否定 (négation polémique) であり、ポリフォニーを前提とする。反論対象となる命題は、この例では、対話者に帰せられる。

・つぎに、命題内容が個人的第三者に帰する例をみよう。

(32)	Richard Dawkins (1976) veut	que nous soyons des « machines créées par nos gènes » [...]
	状況報告層	状況把握層
	公的自己	個人的第三者 (T)

(Raymond Boudon, 2008, « Mais où sont les théories générales d'antan ? », p.31)

・この例はドーキンスの所説を紹介するくだりであり、命題部分は個人的第三者であるドーキンスに帰せられる。より一般的にいうと、<個人をさす三人称主語+思考動詞+que 接続法>の例はこの類型に入れることができる。三人称主語の主節と、動詞が接続法の従属節をもつ文の内容が帰せられる主体については、市川 (2014) が論じているように混乱が起きがちであるが、ポリフォニー的などらえかたをすることでうまく理解できる。

6. おわりに

・接続法の諸事例を通して、内的ポリフォニー、外的ポリフォニーのいずれかが見られ、この点が直説法との対比点でもあった。

・三層モデルにかかわる帰結として、フランス語の接続法は、内的ポリフォニーの事例に関しては公的自己と私的自己の乖離、外的ポリフォニーの事例に関しては話者（公的自己）と他者の懸隔を明示する機能を果たすといえる。

・補足節で直説法を用いる場合は、主体の乖離はなく、主節と同様、補足節も公的自己によって請け負われることを意味する。このことは Korzen (2003) が従属節での直説法の使用を「主節現象」のひとつとして扱っていることとも軌を一にする。

・今後の課題としては、Guillaume (1929)、曾我 (1987) が指摘している、接続法・直説法の対立のみならず、不定法 (などの非定型) との対比も考察したい。

参考文献

- Anscombre, Jean-Claude (2001) "Le rôle du lexique dans la théorie des stéréotypes", *Langages* 142, 57-76.
- Bakhtine, Mikhaïl [alias Valentin Nikolaevitch Volochinov] (1977) *Le marxisme et la philosophie du langage*, Minuit, Paris.
- ミハイル・バフチン (1995) 『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳. 筑摩書店, 東京.
- Carel, Marion (2011) *L'Entrelacement argumentatif*. Honoré Champion, Paris.
- Ducrot, Oswald (1984) *Le dire et le dit*, Minuit, Paris.
- 福嶋教隆 (2019) 『スペイン語のムードとモダリティ』くろしお出版, 東京.
- Grevisse, Maurice et André Goose (2011) *Le bon usage*, 15ème édition, Duculot, Bruxelles.
- Guillaume, Gustave (1929 / 1970) *Temps et verbe*, Champion, Paris.
- Hirose, Yukio (2000) "Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English", *Journal of Pragmatics* 32, 1623-1656.
- 廣瀬幸生 (2016) 「主観性と言語使用の三層モデル」中村芳久・上原聡編『ラネカーの (間) 主観性とその展開』333-355, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生 (2017) 「自分の言語学—言語使用の三層モデルに向けて—」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』2-24, 開拓社, 東京.
- 市川雅己 (2014) 「話者か主語か—現代フランス語接続法の表わす「観念」の主体—」『熊本大学文学部論叢』105, 65-71.

- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店, 東京.
- 今野弘章 (2017) 「デフォルト志向性の解除」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』69-89, 開拓社, 東京.
- Korzen, Hanne (2003) "Subjonctif, indicatif et assertion", Merete Birkelund et alii (éds.) *Aspects de la Modalité*, 113-129, Max Niemeyer, Tübingen.
- Lebas-Frączak, Lidia (2009) "La notion de polyphonie et le subjonctif", *Romanica Wratislaviensia*, 61, 129-140.
- Leeman-Bouix, Danielle (2002) *Grammaire du verbe français*, Nathan, Paris.
- Le Goffic, Pierre (1993) *Grammaire de la phrase française*, Hachette, Paris.
- Lescano, Alfredo (2009) "Pour une étude du ton", *Langue française*, 164, 45-60.
- 守田貴弘 (2005) 「接続法の多角的拡張」川口順二編『フランス語学の最前線』3, 107-139, ひつじ書房, 東京.
- Nølke, Henning (1993) *Le regard du locuteur*, Kimé, Paris.
- Nølke, Henning et alii (2004) *ScaPoLine*, Kimé, Paris.
- Nølke, Henning (2009 a) "La polyphonie de la ScaPoLine 2008", Kratschmer, Alexandra et alii (éds.) *La polyphonie : outil heuristique linguistique, littéraire et culturel*, 11-40, Franck & Timme, Berlin.
- Nølke, Henning (2009 b) "Types d'êtres discursifs dans la ScaPoLine", *Langue française*, 164, 81-96.
- Petiot, Geneviève et Mary-Annick Morel (1994) "Syntaxe et vocabulaire dans l'argumentation de Pascal", *L'Information Grammaticale*, 61, 20-26.
- 佐多明理 (2020) 「ScaPoLine を用いたフランス語における接続法の分析」渡邊淳也・和田尚明編『TAME に関する多言語研究と認知モード』123-144, TAME 研究会, 東京.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』開拓社, 東京.
- Shizawa, Takashi (2015) "The Rhetorical Effect of Locative Inversion Constructions from the Perspective of the Three-Tier Model of Language Use", *English Linguistics* 32, 156-176.
- 曾我祐典 (1987) 「フランス語接続法の規定のしかた」『年報 フランス研究』21, 1-18, 関西学院大学.
- Soutet, Olivier (2000) *Le subjonctif en français*, Ophrys, Paris.
- 田代雅幸 (2014) 「フランス語の副詞句 *au contraire* の論証的な用法について」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』23, 1-13.
- Vásquez Molina, Jesús (2008) "Stéréotypes, instructions et polyphonie", Leeman, Danielle (éd.) *Des topoi à la théorie des stéréotypes en passant par la polyphonie et l'argumentation dans la langue*, 113-128, Université de Savoie, Annecy.
- 和田尚明 (2017) 「言語使用の三層モデルと時制・モダリティ・心的態度」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』44-68, 開拓社, 東京.
- 和田尚明 (2018) 「新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのか—モダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明する—」『日本語文法』18 (2), 28-44.
- 和田尚明 (2020) 「日本語と英語の時制・アスペクト・モダリティならびにその関連現象—包括的時制解釈モデルによる分析—」渡邊淳也・和田尚明編『TAME に関する多言語研究と認知モード』1-57, TAME 研究会, 東京.
- 和佐敦子 (2014) 「スペイン語におけるムードとモダリティ」澤田治美編『ひつじ意味論講座』3, 205-223. ひつじ書房, 東京.
- 渡邊淳也 (2004) 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社, 東京.
- Watanabe, Jun-ya (2006) "Addition quantitative, addition qualitative et la locution *non seulement*", Junji Kawaguchi et alii (éds.) *Cognition et émotion dans le langage*, 191-205, Université Keio (Centre de recherche interdisciplinaire sur la cognition), Tokyo.
- 渡邊淳也 (2011) 「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』45, 79-86.
- Watanabe, Jun-ya (2014) "Les termes d'auto-désignation en japonais : un cas de polyphonie", *Studies in Foreign Language Teaching* 36, 37-46.
- 渡邊淳也 (2014) 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社, 東京.
- 渡邊淳也 (2015) 「論証的ポリフォニー理論をめぐって」川口順二編『フランス語学の最前線』3, 275-304, ひつじ書房, 東京.
- 渡邊淳也 (2018) 『叙法の謎を解く』白水社, 東京.
- 渡邊淳也 (2020) 「認知モード、アフォーダンスとフランス語」渡邊淳也・和田尚明編『TAME に関する多言語研究と認知モード』167-184, TAME 研究会, 東京.